

# 渡りきらぬ橋

長谷川時雨

青空文庫



お星さまの出ていた晩か、それとも雨のふる夜だったか、あとで聞いても誰も覚えていないというから、まあ、あたりまえの、暗い晩だったのであろう。とにかく、あたしというものが生まれ  
た。

戸籍は十月の一日になっているが、九月廿八日だとか廿九日だとか、それもはっきりしない。次々と妹きょうだい弟だいにが生まれたので、忘れられてしまったのか、とにかく、露の夜ごろ、虫の音のよいころではあるが、あいにく、武蔵野生生まれでも、草の中でも、木

の下でも生まれず、いたって平凡に、市中の、ある家の蔵座敷で生をうけた。明治十二年、日本橋区通油町壱番地。ちつぽけな、いやな赤ん坊だったので、何処からか帰つて来て見た父は、片っぽの手にとつて見てすぐ突きかえしたと、よく母が言つていた。

父には三人目の子、母には初児ういごだが、あたしが生まれたときには、姉も兄も、みな幼死していなかった。清潔きれいずきで、身綺麗だった祖母に愛されたとはいえ、祖母はもう七十三歳にもなつたので、抱きかかえての愛ではなく、そしてまた、祖母の昔気質から、もろもろのことを岨はよまれもしたり、そのかわりに軽薄に育たなかつたという賜ものをも得た。

次へ、次へ、次へと、妹が三人、その次へ弟が二人、また妹が

一人と、妹弟が増えて、七人となったが、丁度、二人ばかり妹が出来た時分のこと、コンデンスミルクを次の妹に解いてやったり、その次の子が、母親の膝の上で、大きな乳房を独りで占領して、あいている方の乳房まで、小さな掌てで押えているのを見ると、あたしは涎を流して羨ましそうに眺めていたという。

二歳ぐらいの時だったのであろう、釣つり洋燈ランプがどうしたことで蚊帳の上に落ちて、燃えあがったなかに、あたしは眠っていたので、てつきり焼け死んだか、でなければ大火傷おおやけどをしたであろうと、誰も咄嗟に思ったそうだが、気転のきいたものが、燃えている蚊帳の裾から、ふとんごと引出すと、そんな騒ぎはすこしも知らずに、そのまま眠りつづけていたので、運のいい子だといわ

れたときいた。

あたしの眼に、居廻りの家並などが、はつきり印象されるようになった時分の、小伝馬町、大伝馬町、人形町通り、大門通りおおもんといった町は、黒い蔵ばかり、田舎とちがって白壁の土蔵は、荷蔵くらいなもので、それも腰の方は黒くぬってあつて、店蔵も住居の蔵も、黒くぴかぴか光った壁であつた。それに、暖簾も紺、長暖簾もおなじく、屋号と、印を白く染めぬいた紺のれんで、鉄や厚い木の天水桶が店のはずれに備えつけてあつて、中にはなかなか立派な、金魚や緋鯉が住んでいた。ちらちらと町に青いものが見えれば、それは大概大きな柳の木だ。奥庭には、松や榿かやや木も解つこくや、柏ゆずも柚ゆずの木も、梅も山吹も海棠もあつて、風に桜の花片

は飛んで来ることはあつても、外通りは堅気一色な、花の木などない大問屋町であつた。

問屋が多いので、積問屋——運送店——の大きいのも、すぐ近くに二軒もあつたし、荷馬車がどこかしらに繋いであるので、泣けば、お馬さんを見ましようというか、夕方ならば、お月さんが出たと門かどにつれだされる位、蟬の声もあんまりきかない四辺あたりで、そのくせ、大問屋町というのは妙に奥や裏の方は森閑としていたもので、真夏でも、妙に冷たい風のくる路のあるような、家居であつた。

あたしの家も、祖父のころは呉服を大名の奥に納める家業、近所にあつた祖母の兄の店が大きかったというが、その兄が死んで

から、後妻が、御殿女中あがりだったので、子供に甘くて、店をつぶしてしまつたし、時も丁度御維新ごいっしんの、得意筋の幕府大奥や、諸大名の奥向きというところがなくなつたので、祖父も店をやめてしまつて、あたしが生まれたころには、もはや祖父卯兵衛は物故し、父は代言人を職としていた。

しかし、どうも、祖父の家業は、呉服御用という特種なので、もとより、問屋でもなし、店売りでもなく、注文品を、念入りにしつらえて納めるものであつたようだ。反物を畳む、がっしりした小机とか、定木じようぎとか、模様ものの下絵を描いた、西の内紙で張つて、絹さなだ紐をつけた、お召物たとう紙などが残つていたり、將軍さま御用の残り裂れで、人形の帯や巾きんちやく着が出来てい



たが——もつとも、明治十二年の大火に蔵だけ残して丸焼けにな  
 っ、本所の回向院<sup>えこういん</sup>境内まで、両国橋を渡つて逃げたというこ  
 とであるから、住居の具合は変りもしたであらうが、とにかく、  
 五軒間口の塀は、杉の洗い出しであつたし、門は檜の節無しを拭  
 き込んで、くぐり戸になつていたし、玄関前までは御影<sup>みかげいし</sup>石が敷  
 きつめてあつて、いつも水あとの青々して、庭は茶庭風で、石の  
 井筒も古びていた。奥蔵の三階の棟木には、安政三年癸戌建之、  
 長谷川卯兵衛安備<sup>やすとも</sup>と墨色鮮やかに大書してあつた。

祖父は能書であつて、神社の祭礼や、稲荷の登旗<sup>のぼり</sup>に、大書を頼  
 まれることが度々あつて、父は幼年から亀田鵬斎や、その他の書  
 家たちから可愛がられ、六、七歳の時分から、絵のたちがよいと

いので師匠の国年や芳よしいく幾いくに、養子にくれと懇望されたということであつた。そんな風なので、父は書や画などを好み、剣術は北辰一刀流の、お玉が池千葉の弟子になつて、かなりな使い手になつていたので、彼は江戸ツ児でも、江戸城本丸明け渡しのあとを、守護する役などに用いられたりして、刑部省へ出頭するようになった。

そんなことから法律を学び、増島博士をはじめ十二人の代言人が——後弁護士と改称——出来た最初の、その一人になつた。彼は早くから自由党に属していた。

あたしが生まれた年の元旦試筆には、忘れてしまつたが大物を書き、お酒が好き、撃剣が好き、磊落であつたが、やや、痩せが

まんの江戸ツ児肌で、豪傑でもなければ、学者でもなく、正直な、どつちかといえは法律などは柄にもなく、芸術家タイプの、時によると心にもない毒舌を弄してよろこぶ性質たちだった。母は、父の浅黒く長身なのとちがって、真つ白な、健康そのもののように艶々した、毛の黒い、そのかわりあまり美人ではなく、学問はないが働くことでは、徳川家の瓦解の時、お供をして静岡へ行つた一家で育ち、無禄の士族たちが、遠州御前崎おまえさきの浜で、塩田をつくつた折りに、十四歳の少女で抜群の働きをして、親孝行の褒状をもらったという女しとで、父とは十六ばかり年がちがっている。あたしはこの母が、人出入りの多い家で、厳しい祖母によくつかえ、よく教えられて、子供がふえても女中の数をまさずに、終日クリ

クリと、実によく忠実に尽して、しかも祖母の諭いましめによつて、いかなる折りも髪かたちをくずさず、しじゅう身ぎれいに、家の内外も磨きあげたようにして、終日、ザブザブと、水を豊かに汲みあげているような日常を見て、人は働くものだ、働くことは美しいとの観念をたいそう植えつけられている。そして、また、その当時の、知的階級に属した家に生まれながら、奥さまぶつた容体を学ばずに過し得たことは、母を徳としている。それもこれも、祖母の睨みがきいたからだと、後日母は言っていたが――

そこで、あたしは六歳の年に入学した。学齡ではないのだが、私立尋常代用小学校という札の出たのは後のことで、秋山源泉学校という、別室には、習字と裁縫と、素読だけに通つてくる大おおど

家の娘たちもあるので、六歳でも通えるのだった。

引出しを二ツもった、廉品そまつな茶塗りの手習い机と、硯箱が調えられた。白紙を一帳綴じたお草紙、字が一字も書いてない真つ白な折手本、椎の実筆と、水入れと、※の柏墨が用意され、春のある日、祖母に連れられ、女中と書生と俵夫が机をかついで、二丁足らずの、まつすぐな新道を通って、源泉学校へ入学した。児童たちへのおみやげの菓子の大袋は、幾つかさきに届けられているので、白砂糖の腰高折と目録包みが校長の前へ出された。白い四角な顔の、お習字を教える校長のお母さん、黒い細い顔で菊石あばたのある校長、丸い色白の御新造ごしんぞさんたちが、苦いお茶を出し、羊羹を出してもてなした。先生に連れられてお座（席のこと）につく

と、幾人かの生徒が、お盆に盛りあげた、瓦せんべだの、巻きせんべだの、おこしだの、落雁だのを、全校の生徒にくぼるのに、二個三個と加えてゆくのだった。後に、あたしも貰うようになつた折り、一日に、二人も三人も新入生があると、冬は蜜柑などがまぎつて、子供たちをよろこばせた。

幼年生のときの思い出は、赤い裏の、海軍士官の着るような黒いマントを着てかよつた。小さい前髪と、両鬢やっこに奴やつこさんを結んだおかつぱの童女が、しきりに手習い草紙を墨でくろくしていたことだ。それから、机の引出しや硯箱の中へ千代紙を敷いて、白紙かみを丸めた坊主つくりや、細くたたんで、兎の耳のように、ちよいと結んだ、仮定の人形の首に、色紙の着ものを着せて飾り、おば

さんごっこをすることを覚えた。二年すると妹があがって来た。利口ものの妹は、両親の寵児だったが、強情なので学校ではよくお残りをさせられて、あたしの方がかなしくなって日暮れまで、ガラソとした教場でオロオロしていたが、祖母は一層きびしく仕付けてくれるようにと、そんな時は礼を述べさせに人をよこしたりした。勿論、先生に御母堂や御新造がとりなして帰してくれようとしても、家の者は、お連れ申しますと叱られますと、あたしたちを残して行った。

教場の——それは、先生の住居を廻った、かぎの手なりの平屋建ての、だだっ広い一棟で一室だけだったが、畳があげられて板を張りわたし、各めいめい自の机や、五、六人並べる、学校で備えつけ

の板だけの長い机が何処にか取りかたづけられて、二人ずつ並ぶ、腰かけつきの、高脚の机になった時、代用小学校という木札にかわつて、高等科はないが温習科というのが二年出来た。唱歌の教師が通つて来て、英語もその教師が望むものだけへ教えることになった。すべて、六歳が、ものの手ほどきによい年齢というので、長唄なども習わせかたはきびしい方だった。踊りは、すぐ近くの師匠が、ちいさい時分から眼をつけて、連れに来ては舞台へあげて遊ばせていたが、踊りの師匠の母親が、あまりツベコベ追従するので、祖母がいやがつて行かせないようにしてしまった。どうも、このことは、何か家庭に關係することがあつて、あたしに芸を一ツ覚えさせなかつたことになつたようだ。



堅田という囃子<sup>したかた</sup>方の師匠の妹が父の世話になっていて、あたしを可愛がるのが、母におもしろくないのが原因だったようだが、それよりも、あたしにとって、大変な不運だったのは、母方の祖母が何かの便次<sup>って</sup>があつて、あたしを下田歌子女史の関係する塾とかに——それが、何処であつたのか知らないが、入れたらと言つて来たときには、こんどはどういう意味で祖母が反対したのか、小軋轢があつたふうで、沙汰止みになつてしまった。「小学生徒心得」という読本が、楷書入りの本を読み習つた最初なので、下田歌子の名は幼少な耳にも止めていた名だった。そんなことで、あたしに対する家庭教育は、世の中や、家の業とは大層異つた、後<sup>あと</sup>びつしやりなものであつた。

ともかく泣いて願つて、英語は習うことになったが、あいにく、ぶるさげていった赤インクの大きな壘を、白地のゆかたの出来たての膝へ、前の席のものが立ったはずみにひっくりかえされて、血をあびたようにこぼしてしまつてから、それが長唄杵屋のお揃いで、学校の帰途かえりに行く月浚いに、間にあうように新しく縫われた浴衣であるにしろ、それだけの過失で、英語は下げられてしまつた。

しかし、子供というものは、不思議なところで自分を生かすものである。読みと、算術——珠算たまざんを主にして、手習いと、作文だけの学校でも楽しかった。遊び時間はかなりあるから、あたしはみんなの石版をならべて、即興のでたらめのお話——児童作品

長編小説を、算用数字の2の字へ二本足をつけて、毎日つづけて話すのだった。これはたいした人気で、あたしのお座は、十重とえにも取りまかれ、頭の上からも押つかぶさるほどに愛された。

このことを、ある時、校長秋山先生が自慢で、家へ来て話されると、どうも、いけない結果があらわれて来た。

折りもおおり、幼少から可愛がつて、自慢の弟子にしてくれていた長唄六三郎派の老としより女師匠から、義理で盲目めくらの女師匠に替えられたりして、面白味をなくしていたせいか、九歳ここのつの時からはじめていた、二絃琴の師匠の方へばかりゆくのが、とかく小言をいわれるたねになっていたところ、この二絃琴のお師匠さんがまた、褒めるつもりで、宅うちへお出でなすつていても、いつも本箱の虫の

ように、草双紙ばかり見てお出でなのに、いつ耳に入れているか、他人のお稽古で覚えてしまつて、世話のないお子ですと、お世辞を言つたのだつた。

あたしは、草双紙に実が入つて、日が暮れてから、迎えをよこされて帰つて来て叱られると、大勢のお稽古を待つていたというのが逃げ口上だつたのが、すっかり分かつてしまつた具合のわるい時だつたので、俄然取りしまりが厳しくなつて、よからぬ習慣は、寸にして摘まずばといつたふうには、ともするとあたしは、奥蔵の縁の下に押込まれたり、蔵の三階に縛りつけられたりして、本を——文字のあるものを見ることを厳禁されてしまつた。

それもまた、親の情であつたかもしれない。あたしは、アンポ

ンタンと呼ばれ、総領の甚六とよばれ、妹の色の白さに対して烏とよばれ、腺病質でもあつたのか、左の胸がシクシクして何時もそつと揉んでいたが、十二三には、祖母を揉みに毎日くる小あんまに、叩いてもらうほど苦しかったので、母は、机にギツシリと胸を押しつけてばかりいるからだと怒つてもいた。だが、おそろしく幼時は臆病だったので、蔵へは独りでもものも取りにゆけなしいし、我が家でありながら、ぼんぼりをつけなければ、廁へもゆかないというふうであつたから、十一やそこらで、床の高い、石でかこつた、土蔵の縁の下に、梯子をとりあげられ、むしろ薦一枚の上におかれることは、上の格子から光のくるのを遮ぎられてしまうと、冷汗を流して、こおろぎに脅えたり、夏であると風窓が明い

ていると、そこへ顔を押しつけていたものだった。そんな時、まだちいさかった三人目の妹や四人目の妹が、外から覗きに来て、そのまま土に坐り込んで、黙っていつまでも風窓の内外から顔をおしつけつくらしているのだった。はしごをはずされて三階いましに縛められていても、彼女たちは、いろいろな知恵をふるって鼠のように登って来て、縛めを解いてくれて、そこでお話をせびったり、石版をもって来て絵を描かせたりするのだった。

十三歳になると学校をさげられて、あらたに生花と、茶の湯とに入門させたが、午前九時から午後五時までは裁縫をしこまれた。

我が家の家憲としては、十一二歳を越すと、朝の清掃を大人同様、女中も書生もわかちなく一様にさせることで、きょうだい妹弟の世

話、床のあげさげが、次の妹へと順送りになると、煙草盆掃除から、客座敷の道具類の清ぶきになる間までに、庭掃除から、玄關掃除、門口に箒目を立てて往来の道路まで掃くこと、打ち水をすること、塀や門をあらったり拭いたりすること、敷石を水で洗ひあげingことを、手早く丁寧に助けあつて励んでやらなければならぬ。それは夏冬をきらわず、足袋などはいてしてするようになまやさしいやりかたではゆるされなかつた。働かないのは、一番目上で老齡である祖母と、幼いものたちだけだつた。父も自分の床をあげてキッチンとしまひ、書齋の掃除まですることもあつた。裁判所へ行く前に、多くの客が、二階へも階下<sup>した</sup>へも、離れへも、それぞれ他人に聴かせたくない用をもつて来るので、母は一時二

時に寝ても、朝は五時かおそくも六時前には起きていた。

夏など、みんなが目ざめる前に、三味線の朝稽古をすまして来よう、夜の白しらしら々あけに、縁の戸を一枚はずして庭へ出ると、青蚊帳のなかに、読みかけた本を、顔の上に半分伏せたまま眠っている母を見ると、母も本は読みたいのだなあと、たいへん気の毒な気がして、早く行つて帰つて来て、掃除やなにか手つだおうと思つた。

## 二

朝夕に、腰を撫で、肩をもんであげた祖母は、八十八歳であた



しの十五の春に死んだ。あたしを一番愛していたが、厳しいしつ  
けでもあった。一ツ身を縫うにも、二度三度といて、縫い直しを  
させるのだった。そういうことを恥かしながらないアンポンタンで  
も少々気まりの悪いこともあるし、教える人の方が、まだ小娘さ  
んなのに、あんまりひどいと怒ることもあった。

ともかく、あたしの教育は、本を読ませないことというに、何  
時かきまってしまっていたが、まだしも祖母のいるうちは、あた  
しも小さくなっていたし、母たちも幾分祖母へ遠慮をしていたが、  
段々とあたしは知恵を出して来た。読み書きをするのに、母が労  
れて眠る時分をはかり、妹と二人寝る部屋の障子の方へは、屏風  
やら何やらで灯影をさえぎり、これでよしと夜中の時間を我がも

のがおに占領しだした。

ところが、洋燈ランプの石油はへって、ホヤは油煙で真っ黒くなる上に、朝寝坊になって、父が怒って、冷水みずをあいている口へつき込むことなど、仕置きされるのが重なってしまった。ある夜中には、寝たと思った母が部屋へはいつて来て、大いに怒って父を呼び、父が優しく見逃しているのだというので、父から楊弓をもつて激しく折檻された。祖母のいるころでも、母が強くと怒ると、姐あねさまのはいっている手箱も、書きものの手箱も、折角、かくして、ぽつぽつと溜めた本類も、みんな焚もしてしまわれたりしたが、そんなにしても、妹たちも好きだったので、いろいろな工夫をしてくれた。家にも何かしら読みものは多くあった。母が、浴衣な

らば、家内が多いので、一度に十反くらいを積んで、縫えと出すと、もう家において縫うようになっていたので、静かな、なるべく母の目から遠い二階の部屋にあがって、それこそ朝の仕事も早くすませ、身じんまくも早くしてしまつて坐る。そうになると、頭をよく働かして、たいへん手早く巧者に裁断たつてしまつて、早縫いの競争なのだが、母が見廻りにくると、実に丁寧な縫いかたをしている。で、一日に一枚はこの分ではどうかと思つてもらつておいて、次の妹と二人がかりで、二枚も三枚も拵らえあげてしまつて、それからの残りの時間を、雑読、乱読、熟読の幾日かをものにしていった。

そこで、おかしいのは、母は、なんでそんなに厳しくしたかと

いえば、出来もしないことにふけて、なま半可な女ものになるのを、ばかに怖れたのではないかと思う。だから、あたしが、書いたり、読んだりするのは気に入らないが、ほかのことで、皆とひとしなみに、楽しみとして見聞きすることは許さないではないから、あたしがずっと小さいころ、書生が幻燈会をして近所のものに見せたりするのを、共に楽しんで見ていたように、友達たちで、三味線などひいて芝居ごっこなどしても、それは遊びとして大目に見ていた。そして、あたしどもが、幾分、新知識を得ようとするとき、玄関の大火鉢の廻りや、紫檀の大机のもとに集まって、高等学校から来る大先生おおに、西洋ものの小説や劇の話お話ををきくのも、それも許した。

大先生といつても、一高の生徒だった鵜沢総明氏が、まだ惣一といつた昔のことで、はじめあたしたちは、千葉の田舎から来たほやほや中学生の書生さんの頭に、白髪しらかが多くあるので、黒い毛の方を抜いてしまう方が汚くないなんぞと、頭の毛を引っつかんだりした、いけない幼女だったが、独逸人の教師の家へ寄宿して、やがて一高の生徒になると、忽ちあたしたちの大先生にあげめ、新しい話——つまり文学を聴くのに貪慾になって、それからそれからとせがんだものだった。次の妹は、趣味の共通から、共同の陣を張りはするが、もともと母の秘蔵娘であるところから、ちよろりと裁縫の時間の内幕を洩らしてしまったりする。そこで、いよいよ懲らしめのため、も一つには行儀見習い、他人の御飯を

頂かないものは我儘で、将来人が使えないという、立派な条件を言いたてに、母が大好きで、自分が、旧幕時代の大名奉公というもの、御殿女中というものにあこがれていた夢を、時代の違った時になって、娘によって実現して見ることにきめてしまった。父が、旧岡山の藩主であつた池田侯の相談役であつたのと、そのすこし以前にお家騒動が起りかけたりしたを処理したので、そんな縁故から頼み込んで、旧藩臣の身分のある者の娘でなければつかわなかつたという、老侯夫妻のお小姓——平つたくいえば、小間使いみたいな役につけてもらうことになつた。十六歳だつた。

若いものなどは皆かきもく目いらない広い邸だつた。鼻の頭の赤い老臣が、フーフーと息を吹きながら、袴の裾で長い廊下を拭くように

歩いていった。それが有名な国文の学者だといった。表門の坂を俥なり馬車なりが下つてくると、飛び出して、主人の時などは土に手をつく人品の好い門番が、以前は一番上席の家老だったというふうで、小使いも下の女中もみんなお婆さんかお爺さん。たまたま二、三人、上女中かみでないものに若い女がいたが、年寄りもおんなしことで、ただ年が若いというだけ、新時代に対してなんにも知らない人たちがばかりだった。

鍾しょうあい愛あいの、美しい孫姫さんが、御方おかた

(姫の住居―離れたお部屋)に乳母たちにかしずかれていた。侯爵夫人になられた細川博子さんがそのお姫ひいさまであつたが、あたしが奉公してから間もなく、ウエスト夫人という西洋人のところへ、英語を学ばれに通う

ことになったとき、そのお乳母さんが附いてゆくのが、およそあ  
たしが、生涯に羨ましいと、人のことを羨んだ、たった一つのこ  
とで、お今さん、あなたは傍にいらつしやるのときいたら、はい、  
すぐお傍にいますが、なんにも覚えてませんと言った。何とやら  
ん無念のおもいが、胸にグンと来るのを、どうしようもなかった  
のは、志望してそのお伴のまたお伴に、ついてゆけることなど、  
およそ出来るわけのものでもなかったからだ。次の部屋にしよう  
とも、あたしの耳は発音をきくだろう、耳で覚えたものを寝てか  
らブックに照し合わせても解る筈だとは——とは、とはと、思い  
もするが、あたしは読ませないようという意味が、御奉公の眼  
目におかれてるので、お下がりの新聞さえ読ませられないのだ。



御家令というのが、もとの上席家老格で、その人があたしの父の親友、そしてその人が母からよく頼まれて、どうも変な子だということを、年寄りたちに伝えてあるし、母がまた一々、他の人にも、あたしの病いの虫のように話したのであるから、あるいは、老侯爵は面白がって許してくれるかもしれないが、傍のうるささが思いやられて、お孫姫さま英語御教授をおうけになるお供を、お願いする機会はなかった。

だが、それは、その場合大望すぎたのだ。あたしはこれでなかなか自由の時間を持っていたのだ。家にいる時とちがつて、夜中の時間は絶対に自由にできる。といって、もとより人に知れないようにではあるが、そこにはまた何やらん、やりよさがあった。

お上女中<sup>かみ</sup>の部屋は二、三人ずつの共同部屋で、八畳、六畳、四畳半、三畳の四室に屋根裏二階が物置きになっていた。あたしが置かれた部屋は格の好い方で、老侯の愛妾の部屋に隣り、殿様付きの老女格の人と、御前様づきのお側女中との二人が一人の下女中<sup>しも</sup>を雇っている世帯へ、食事は御番<sup>ごばん</sup>——主人の食事係が賄うことにして、部屋だけ居候だった。

老女中さんたちは自分賄いの共同台所をもっていたのだから、いきおい物資の消費を節約する。御殿は電燈であったが、おひけになると御寝所や次の間は燭台になって、西洋蠟燭がともされる。それを朝ごとに掃除するのもあたしの役目の一ツだ。あたしは、涙を垂らしたともしかけの蠟燭を、折角きれいにした燭台へさす

のは景気がよくないので、日ごとに新しくした。夜が長いと、もしかえるように新しいのを一本添えておくことも忘れなかった。それで、知らず知らずにもしかけが大きな箱へ溜ってくる。それを一本もつて来て、ごく短いのを机の角に立てて、ふとんの上にニヤニヤしていたものだが、今度は、そのうちの長いのを選んで、部屋用にさせた。ともしかけは、それまでは取り捨ててしまわれたそうなのだが、老女たちは感心だとよろこんだ。

それによい事は、隣の部屋ぬしも夜中は不在、わが部屋もお詰め処へ寝る番が二人とも一緒の日が多い。そうなるとう居候が大威張りで、自室の女中も、となり部屋の女中も、若いものがお引けすぎに寄って来て、芝居の噂話をよろこんでして、お菓子を食べ

べて帰つてからが我が世なのだった。権威のあつた御愛妾さんも、御酒が飲めるほうで、毎晩部屋で晩酌のあとは、部屋女中から、あたしからきいた芝居の話をきくのを珍らしがつて、夜中の仕事も聞かぬではないが、そんなに好きなら仕方がないと、大目に見てくれたりした。あたしは六円の月給をはじめて得て、三円を食費の足しに差引かれても、残るお金で毎朝小使いさんが下町へ買ひものに出るのに頼んで、書籍を購うことが出来た。その時分『女鑑』だとか『大日本女学講義録』などが出て、学びたい餓えを、すこしばかりは満たしてくれた。

しかし、間もなく、あたしの胸は本痛みになり、隠していたが、ある日の正午ごろ、おくれた朝の仕事をかわつて、身じまいにか

かろうと、倒れそうな身を湯殿へはこび、風呂にはいるとだめになった。ここで倒れては大変と、拭うひまもなく衣服に身をくるんで、部屋までどうして帰ったか、壁ぎわに横になったまま、半ば意識を失って、死生の間を彷徨する日が十日もつづいた。幸いと、赤十字社の難波博士が主侯の診察に来られる定じょうび日だったので、あたしは肋膜炎の手当がほどこされた。冬のはじめのことだった。

赤十字病院へ入れるにしても、暖かい日の真昼、釣台でといわれたのを、母は家へ連れて帰りたいと願った。彼女も死ぬと思つたのであろう。あたしは夢中で、暫らく帰らない家も見たいとも思っていた。送るものは、早く癒つて、また帰つて来なさいと、

主侯夫妻まで部屋に来て見送つてくださったが、命冥加にもどうやら命はとりとめた。二月の末に、病みあがりの、あと養生もしないで邸へ帰つた。その時は息切れが甚しどいくらいでわからなかつたが、喘息がその次の冬になってあたしを苦しめ、心臓も悪かつた。でも、どうにか押し隠して、自分の自由のある夜の世界を楽しんでいたが、息切れと、膝関節炎になつて、日本館の長い廊下や、西洋館の階段を終日歩き廻る役は、だんだんつらくなつて、人の見ていない時は這つたりしでした。

足かけ三年目の初夏、奉公をさげられた。あたしは家において、また裁縫や解きものの時間を利用しでした。

おかしな事に、肋膜で病らつたあの大病のあとの、短い日数ひかずの

うちに、あたしは竹柏園ちくはくえんへ入門していることだ。ほんとは、もつと早く奉公に出されぬ前、祖母が死ぬと直きに、弟をねんねでおんぶした仲働きが、人形町までといつて出た、あたしの買いの供に付けて出されたが、この女中は二十歳はたちを越して、何かよくわかつたから、却つて道案内をしてくれて、神田小川町の竹柏園の門に立つたことがあつたのだ。まだお若かつた佐佐木信綱先生と、新婚早々の雪子夫人は、その時、花簪を挿した、ちりめんの前かけをしめていた、あたしの姿を今でも時々おっしやる。さて、入門したといつても、こつちがしたつもりだけで、実のところ、東脩そくしゅうもおさめたやら、どうやら、福島の人で、あたしたち姉妹を可愛がつてくれた、あまり裕福でない、出入りの夫

婦にたのんで、榛<sup>はいばら</sup>原で買った短冊に、しのぶ摺りを摺ってもらいにやって、それが出来て来たのを、十枚ばかりおみやげに持っていったのが、ありつたけの心持ちだったのだ。ずっと帰って来てからは、大胆になって、かまわずに稽古日には朝から出かけた。もとより本はないから、先生のうちの玄関の、欄間までギツシリ積んである本箱の上から出して頂くのだった。夏の朝、早くから行くので、昌綱さん（先生の弟御）が大急ぎで座敷を掃いて、踏みつぎをして、上の方の本箱から、納めてある和綴<sup>わとじ</sup>本の大判のを出して貸してくだされた。源氏や万葉のお講義、その他の物語のこともあった。先生の奥様が、母の妹の連合いの上官で、官舎であつたのかどうか、おなじ猿楽町の、大きな門のある構内に、お



住居があつたのと、藤島さんの一粒だねの令嬢をおかたづけになつたほどなのだからと、先生については、よほどの信用があつたから、母も、国文学を学びに通うことは見て見ぬふりをしてくれるようになりはしたが、許可されたのではないから、足りても足りなくつてもお小遣いのうちから小額の月謝をもつて行つたのだが、気まりわるくも思わなかつた。朝の仕事をすまずと御飯を食べている暇がなかつた。神田小川町までではあるが、歩いて通わなければならぬ。大雨が降ると、帰りには足駄をぬいで跣足はだしで歩いてくるので、漸く、近所の眼がうるさくなりだした。そんな日には、大問屋の店の者は、欠伸あくびをしているのもあるから、あたしの育ちを、赤ん坊の時から知っている、旦那たちまでが気にし

だした。

「先生ンとこのお嬢さん、どちらへおやりになつていいのかと、申す者もございます」

と、父に耳打ちをする者もあるので、母が気にしだした。縁談なども、選りにもよつて近所の鉄成金の家で、家じゆうで芸妓遊びをするといった派手な家からの所望を、昔を知っているから大事にするだろうとか——厳しく躰しっけたのは、そんなところへやる為ではなかつたであろうに、若き娘は、暮しむきの賑わしさに眩惑されて、生来の氣質をあらためるかとも思つたあやまりであつたでもあろう、もとから知りあつていた両家は頻繁に往来し、道楽で勘当されていたという次男に分家支店をもたせ、あたしを

貰うことにきめてしまった。

——いやだ、いやだ、いやだ。

訴えるすべもないので、あたしは枕もとの行燈を、ひと晩中に真つ黒におなじ字で書きつぶしてしまった。父に見られたら、どうにかなるという思いで一ぱいだったが、なんのこと、翌日は真つ白に張りかえられてある。どうしてよいか分からぬ憂鬱に、病わずらいついた。長く寝てしまったが、漸く床の上に起きあがる日、びつくらしたのは、立派な結納の品々が、運びこまれ、紋付きの人たちが、病氣全快のあいさつと一緒に、祝着申しますとあたしに悦びを述べた。

だが、決心はついた。自由を得る門出かどでに、と、あたしは寒い戦

慄のもとに、親のもとを離れる第一歩を覚悟した。昔の人が厄年だという十九歳の十二月の末に、親の家から他家へ嫁入りとなつて家を出た。嫁にやられるには違いはないが、あたしは円満に親の手を離れる決心であつた。だから、途中からでも逃げたい気持ちだつたが、父の恥を思うと躊躇させられた。それにまた、華々しいほどの出入りの者にかこまれて、身動きも出来ない羽目となつていた。母は、さすがに、子の心は察しがつくと見えて、紙入れをもたせなかつた。一銭の小遣いもわたさなかつた。

以上が、明治十二年末から、二十年の末までの、東京下町の、ある家庭の、親に従順な一人の娘の、表面に現われない内面的生活争闘史である。以下は、彼女が、彼女自身で、茨を刈りながら、

自分の道へと、どうかかこうにか歩き出して来た道程であるが、はじめから本道を歩きださぬ者には、よけいな道草ばかり食つて、いくらも所念の道は歩いていない。振りかえつて見るのも嫌なくらいである。あたしはまっしぐらに、おもてもふらず行こうとすると、きつと障碍が出来てくる宿命に生まれついてでも居るようだが、いつて見れば畢竟は努力が足りないのだ。断わつておきたいの、日に日に進歩した女子教育とは、およそ反対の歩きかたであつたので、これが明治女学勃興期の少女の道と思つてもらいたくない。きわめて歪んだかたちなのだ。女流小説家として有名な、故一葉女史は、その前年明治廿八年末に物故されている。

## 三

そこで、生活は一変したが、婚家では困ったお嫁さんをもらったのだった。陽気な家のものたちは、あからさまに言った、水に油が交ったようだ、面白くない、みんながこんなに楽しく団欒して食事をするのに、この娘は先刻さつきから見ていると、一碗の飯を一粒ずつ口へはこんで、考え込みながら嚙んでいる——貧乏公卿の娘でもないに、みそひともじか——お姑さんはあらればもなく、そつと書いたものを見つけると、はばかりへ持って行って捨ててしまふ。

病気がちなあたしは、芝居のお供、盛り場での宴席、温泉場行

きもみんな断わつて留守番を望んだ。出入りの貸本屋にお金を出して新本をかわせ、内ないしよ密で読んで、直きにやっつてしまうので、彼は注文次第で、どんなむずかしい書籍ほんも買つて来てくれた。あたしはまた、解ろうがわかるまいがむずかしいものに嚙りついて、餓えきつた渴きを癒した。だが、道楽息子が直きにまた勘当されたとき、この時こそ自分だけで自分を生かす時機ときがきたと、離婚のことを言い出すと、先方の親たちは妙なことを言い出した。悴の嫁にもらつたのではない、家の娘にもらつたのだ。だから、何処へいつても嫁とはいわなかつた、娘だといつてきていた、実子の娘だと言つていたではないか、帰さないと。

あたしは世間知らずだった。自己のことにばかり目がくらんで

しまつて、明瞭はつきりした眼をもたなかつた。真の愛情がないものが、なんでそんなことを言うのか——変だとは思わないで、ただ厭だとはばかり思つた。だから、厭さが昂じて死にそんな病氣ばかりした。生まれた土地に名声のある我が家を、古鉄屋から紳商になりかけた家が、利用するのを察知しなかつた。父の身边にすこしの危惧も警戒もしなかつた。

父は、前にも言つた通り、自由党の最初に籍をおいたが、脱党して以来口ぐせのように、法律も身にあつた職業ではない、六十になつたら円満にこの家業もやめると、子供であつたあたしなどにさえ、時折り洩らしていたほどで、あたしを相手に茶をたてたり、剣を磨いたり、下手な俳句をひねつたりして、よく母に、あ



あなたが<sup>ほつく</sup>発句をつくるので考え込むから、おやすが真似をして溜息をつくと、間違った抗議をしたものだった。父は幼少のあたしを連れて、撃剣の会へいたり、釣堀にいたり、政談演説会へいたりした。種々な名誉職をもつて来られても、迷惑だと断わるのがつねだった。よんどころなく弁護士会長とか、市の学務委員とか、市参事会員とかにはなっていたが、恬淡な性質で、あばたがあるので菊石<sup>きくせき</sup>と号したりしたのを、小室<sup>しのぶ</sup>信夫氏が、あまりおかしいから溪石<sup>けいせき</sup>にしろと言ったというふうな人柄だった。

しかし、父の酒飲みなのを知って舅たちが毎夜酒宴を張って、料亭に招じるのを、あたしは見まい聞まいとばかりしていた。いつであつたか、父は米国から帰って来た星亨氏に内見を申し込

まれ、星氏が総理大臣になることがあつたら、父に市長になつてくれと言われたが、嫌だと言つたといふことは、あたしに話したが——どうも、あたしの婚家のいやな氣風が、生家の、あのものがたい家憲の一角を、ぶちこわしている氣がして、不安に思ひながら、あたしは父と母にも遠くなつていた。

父は、不名誉な鉄管事件というものに連座した。父は手紙でもつて言つてよこした。

長く考えていた良いことを、ちよつとした短いみじかい分時にぶちこわしてしまつた。間違つた思慮は一分時で、悔いは終生だ、子供に濟まない——

あたしは、それを読んでやつぱり父だつたと嬉しく思つた。誰

のことも、そのよつてきた道程もいわない、すべてをみんな自分で背負おうとしているのに、あたしは父を見た。よし、あたしは、この後自分のゆるさぬ曲がつたことを一分もすまい、潔癖すぎて困るほど清廉に生きて、父のあやまちは性分ではなく、弱さから負つた過失だ。自己の罪として受けた心根を知るあたしだけが、銭を愛さず、事志とちがつた父の汚名を、心だけで濯すすごうと思いをかためた。

で、読み、書くために自立しようとして来たそれまでの志こころざし望しを曲げて、まず、人間修業から出直しすることにした。独立するまで、二度は帰るまいと立ち出た実家へ帰つて、病をやさない、すこし快くなると釜石鉾山へ行つた。そこで三年もすごせば

勘当息子の帰参が叶うという約束のもとに行つたのだ。そのあとであたしはあたしの道へ出ようと思つた。鉱山所長の横山氏夫妻が、その息子一人では預かれぬと言つたから、行つてもらいたいというのが、先方の両親の願ひだつた。

事件の最中で、心弱くなつていた父は、病みやつれたあたしを上野駅まで見送つてくれて、二度とやりたくないのだがと呟いていた。しかし、この山住みの丸三年は、あたしに眞の青春を教えしてくれた。肝心の預けられた息子は居たたまれなくて、何かにつけて東京へ帰つて長くいるので、あたしは独居の勉強が出来た。県道からグツと下において、大きな岩石にかこまれた瀬川の岸に、岩を机とし床として朝から夕方まで水を眺めくらして、ぼんやり

と思案していた。ある時は、水の流れに、書いても書いても書きつくされないような小説を心で書き流していた。「一元論」を読み、「即興詩人」を読み、馴れない積雪に両眼を病んで、獣医も外科医も、内科も齒科もかねる医者に、眼の手術をしてもらって、それでも東京へは出ず、頑固に囲爐裏のはたや炬燵のなかで、繻帯をした眼で、大きな字を書いて日を送っていた。

横山所長は、釜石鉞山をものにするまでに、座敷牢へ入れて止められたほどの苦勞をして来て、くされ半纏に縄帯ひとつで、鉞夫と一緒にあって働いた人であるし、夫人は夫を信賴して、狐狸の住家だった廢鉞の山へ来たという、東京生まれの女性であっただけに、大變あたしを愛いとしんでくれた。

——はじめ聞いていたことと、あんまり違うので——と夫人は言われた。他の者なら、辛抱なさいと言うのだが、あなたにはそうは言わない。すこしも早く、あなたは自分だけになる方が好い。もう山になんぞいないで、十分に自分の道へ出た方が好い。

そう言われて、はじめて道が開けた気がしでした。あたしはこの山住みで、小さな作ものを投書して特賞を得たりしたが、これは実力がどの位な辺かという試しにしたことで、これならなぞというたかぶった気持ちではすこしもなかった。

東京へ帰ると、舅が亡くなったりして、離婚のことを言い出せなかった。だが、ぽつぽつと書くものは通るようになって来て、今度は離婚に、婚家の方で意地悪をはじめ、かなり苛酷な目にも

逢ったが、その為あたしの健康がおとろえ、もはや生きまいと思われたほどだったので、肺病ではしかたがないと、漸く事がきま  
った。

その前にあたしは家を出て、実家の世話になっていた。それは  
一つは、勘当息子にも以前の家をあてがわれ、多少の資本もとでをもわ  
けられるようになったから、あたしの心に定めた通りになったか  
ら、やましきところがなかったのと、も一つは、あたしの山に居  
ることを聞いて、作品から慕ってくれていた少年があつたから、  
あたしは、心にもなき家に止まって、その少年の愛を告げる心を  
掴んでいるのは、両方に対して心苦しく感じたからでもあつた。

あたしは、漸くものを書き出しうるようになりつつあつた。遅

まきながら築地にあつた女子語学校の初等科に、十二三の少女たちと一緒になつて英語をまなび出した。そのころ父は、一切の公職から隠退して、いくら勧められても出ず、まことに世捨て人のごとく、佃島の閑居に隠遁していたので、あたしは父の傍にいて、父を慰めながら、住吉の渡船わたしをわたつて通い、日本橋植木店だなの藤間の家元に踊りをならいなどして、劇作を心がけ、坪内先生によつて新舞踊劇にころざしていた。

## 四

そのころ、母も、まだ巢立たぬ弟妹たちのために、父にかわつ



て、生活の保障をしようとして彼女の性分にあつた働きをしていた。以前もとすこしばかり、其処を手に入れる時に、お金を用立てた人が死んで、その後家たちは、新橋で旅館をもとからの商しょうばい業にしてがあるので、丁度引受け手を探していた、箱根塔の沢の温泉をゆずってもらつて、経営しはじめた。

馴れないことではあつたが、母は働きずきであつたし、客あしらいも知つているのに、父のまがつみを同情する知己の鼻肩もあつて、温泉亭家業は思いがけないほど繁昌した。それだけに、母も漸く、女も何か知らなければ、こんなことしか出来ないと悟つた。かような家業でなければ子供を教育しながらでも出来るのにと、それは、ひしひしと彼女に後悔に似たものを思わせて、あた

しを、今度は以前とはあべこべに大事にしてくれ、もはや、家を出てくれるなど言い出した。

あたしの自立は、また此処で一頓挫しなければならぬことになった。しかし、書いたものは、歌舞伎座や新富座などで、一流中の一流俳優によって上演されるのがつづくようになった。女流劇作家も他にいなかったし、女流の作が劇場外からとられるのも最初だったが、どうしたことか、絵ハガキなぞも かみがたや 上方屋から売り出されたりしたので、母はいよいよ悦ばされ、袴をはいてくれれば、頸からかける金鎖と時計を買ってあげるなどと、とぼけたことを言ったりするほどであった。そして彼女も、一層活動しようとした。

そのころ、芝公園内の、紅葉館こうようかんという、今でこそ、大がかりな料亭も珍しくないが、明治十四年ごろの創立で、華族や紳商が株主になって、いわゆる鹿鳴館時代の、一方の裏面史を彩どる役目をもっていたうちが、創立者の野辺知翁が死んでから萎微していたのを、当時の社長におされた中沢銀行の中沢彦吉氏が、母を見込んで引き受けてくれないかと、再々足を運ばれた。

中沢氏の後妻には遠縁の女もいつているので、母はたいへん気乗りがして、繁昌な箱根の店を投げ出してまで紅葉館をやろうとした。あたしは反対したが負けた。ともあれこれは、我が家の第二の招いた災難になったのだった。母は精神をすりへらして挽回し、積累の情弊を退ぞけたが、根本の利益を目的の株式組織とい

うことをよくのみこまないでいた。意志の疎通せぬために、中沢氏が歿しられると、母は憤死しはせぬかと思うばかりの目にあつて、結局やめた。眼の届かなかつた箱根の方もやめなければならなかつた。

あたしはその間に、舞踊研究会をまとめて、歌舞伎座で大会を二回、紅葉館で例会を六回催した。新舞踊劇と、古く、忘れられがちな踊りの復活を旨とした。幸いに、菊五郎も三津五郎も猿之助も、米吉、男寅の、踊れる俳優たちと、藤間は勘十郎、勘右衛門の両家、花柳からも、あらそつて出演し、新橋芸妓では踊り手の七人組をはじめ大勢が出てくれた。

自作の新舞踊劇「空華」は奈良朝時代の衣装背景で、坪内先生

の「妹背山」の試演がその式で紅葉館で催されたことはあるが、そうした服装での舞踊ははじめてであった。衣装は松岡映丘氏、後景は組みものだけが大道具の手でつくられ、画幕は氏のほかに美術学校から大勢来られて描かれた立派なものだった。作曲は鈴木鼓村氏の箏を主楽にしたもので、三味線楽もあしらったが、箏曲をもとにしたのは、やはり最初でもあった。

また、劇場には出演しない葺屋町の吉住一門に歌舞伎の舞台に出てもらい、小三郎氏の作曲になる「江島生島」を初演したのもその会であった。もとより、井上八千代流の京舞をも出した。小山内薫氏がロシアやフランスからもつて来た、洋行みやげの舞踊談も、幻燈で示されたりしたのもこの会の収穫だったのだ。

これが動機となつて菊五郎一門の、新しい劇研究の「狂言座」を結成した。帝国劇場での第一回公演には坪内逍遙先生の新舞踊劇「浦島」をさせて頂くおゆるしをうけた。森鷗外先生には「曾我」を新しく書いて頂いた。第二回には、木下杢太郎氏の「南蛮寺門前」を中沢弘光氏の後景、山田耕筰氏の作曲でやった。吉井勇氏の「句楽の死」は平岡権八郎氏に後を描いて頂いたりした。あたしはまっしぐらに、所信のあるところへ、火のような熱情をもつて突きすすんでいった。

だが、母の打撃は見てすごされなかつた。それに実家では、弟の若い嫁が、赤ん坊を残して死んだ。あたしの手にはそれは受けなければ、残された子は死にそうなほど弱かつた。それに、も一つ、

三上は恋愛を申入れてきかない。それに自分の方へ引っぱってしまおうとする。あたしは、家庭婦として、あつちこつちに入用になつて、引きちぎれるように用をおわされた。

それを振りちぎつたらば、今日、もすこしましな作を残していでであろうが、父のことに対して、心に植えた自分自身との誓いは頭をもた持上げて、まず、人の為になにかする

そうして、すべてを捨ててかえり見ぬこと幾年？ 昭和三年に「女人芸術」に甦なまなまえつてからの爾来は、あまり生々なまなましいから略すことにする。（昭和十六年十一月〜十七年一月「新女苑」）





# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」青蛙房

1971（昭和46）年5月15日初版発行

※「先生ンとこ」の「ン」は底本では小書きになっています。

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 渡りきらぬ橋

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>